

秋 冬
春 夏

台湾徒然



第56回

12年前の記憶

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きた』、『台湾先住民・山の女たちの聖戦』、『タロキ峡谷の閃光』（以上現代書館）、『台湾革命』（集英社新書）、『明治の冒険科学者たち』（新潮新書）など。元日本軍人軍属の最期の声を綴った『台湾戦後65年』<http://www.taiwanseigo.jp/>を更新中。

およそひと昔まえのことだ。そのころ私は台北市の中心部のアパート3階に住んでいた。1999年9月21日午前1時47分15秒過ぎ、無理やり体を揺さぶられる感覚があつて目を覚ますと、あたりは真つ暗。そして部屋中の家具がぐらぐらきしんでいた。

決して慌てることのない妻がすでにベッドに座つていて、小さく「地震よ」と言った。——地震か、と思つて私はそのまま寝た。普通の日本人にとつて、家の壁でも崩れださない限り、地震とはそういうものである。

夜が白むころに目を覚ますと、妻は同じ場所に座り込んだまま、ラジオを抱えている。ぼそりと「停電よ」という。——停電か、と思つただけである。

しかしラジオを聴いているうちに、尋常ではない雰囲気がつたわってくる。もちろん全貌はわからない。キャスターが、中部の南投県が震源らしいといい、たまにリスナーから奥地がたい

へんなようだとコールインが入る程度である。

午前中じつとソファに座っていたが、テレビ局なら電源があるだろうと出かけたものの、バスが来ないので歩いた。たしか平日だったが、市内はまるで旧正月のように静かである。

テレビ局でテレビを見て驚いた。M7を越す大地震。しかも、多くの知人が住む霧社、埔里などが壊滅状態だという。

深夜になって電話が入り安否がつかめだした。日本からも続々問い合わせが入る。日本でテレビニュースを見ている人には、台湾中が瓦礫に埋まつているかのように見えるのだが、我々は電気がない以外なんの支障もない。

3日目、私は現地に入った。予想を絶する被害が点在していて、多くの人は運動場に寝泊まりしていたのだが、沈んだ雰囲気はまったくなく、中秋之夜とかで知人宅の庭先では、倒れた家

の前で酒盛りが始まつたりした。たまたま山間部に被害が集中し、死者は2400名にとどまつたが、都市部に波及していれば、さらに甚大な犠牲をとらなかつたであろう。台湾にとつて20世紀最大の自然災害となつた。

私と前後して、緊急援助隊に続きボランティアの団体が続々と入つてきた。そのおよそ8割は日本人のグループだつた。日本政府や諸機関の対応も早かつた。

1999年9月という、発生した時機が絶妙だつた。阪神大震災の翌々年



99年秋に台湾中部山間部を襲った大地震

だつたのである。神戸で産声を上げ鍛え上げられボランティアたちにはまだまだエネルギーが充満しており、彼らは大挙来台し、神戸で蓄積した経験を存分に発揮したのである。

それまで台湾にくる日本人といえは大半が中高年だつた。若い世代同士が対等な立場でひとつの作業に取り組むという格好の機会を、この地震が与えてくれたことになる。

当時も台湾と国交がある国は少なく、台湾は世界の孤児とも呼ばれたりした。しかしこの未曾有の災禍が図らずも、台湾の存在を世界中に紹介し、世界の人々との絆を深めるきっかけにもなつたのである。

過剰ともいえるほどに寄せられた支援の輪。台湾の人はそれを温かく受け止め、そして12年を経ても忘れてはいなかつた。このたびの東北関東大震災への機敏な対応にはそうした背景があつたのである。